

歴代理事長からのメッセージ



在任期間：
1998年7月～2000年6月
現：公益財団法人大川情報通信基金
会長

い が ら し み つ お
五十嵐 三津雄

コロナ禍にあって、テレワークやリモート会議等、情報通信の果す役割はますます大きくなり、産業・社会のど真ん中に座っている。我が国は、1985年にいわゆる“電気通信自由化法”が施行され、情報通信革命の時代を迎えた。

1990年代はバブル崩壊、“失われた10年”とも言われる景気後退の時期となった。しかしその中にあって、情報通信産業、とりわけ携帯電話の普及は、我が国の経済に大きく貢献することとなった。

1994年には、ITU全権委員会議が京都で開かれ、その長丁場の議長を内海善雄氏（当時郵政省国際部長）が務められた。

それから2年経ち（私の郵政事務次官当時）、長谷川憲正郵政省国際部長（当時）より、アメリカ等の情報誌等から、次期ITU事務総局長に内海氏が立候補すれば最有力との情報もたらされた。京都全権委員会議での議長としての采配振りが高く評価されたからであった。

ご本人の意向を確認することから始めなければならないの

は言うまでもない。内海氏の承諾を得た後、NTTをはじめ関係者の支援承認を取り付けることができたので、初のITU事務総局長選挙へと走り出した。

前半は楠田修司郵政審議官（当時）、後半は長谷川憲正郵政審議官（当時）がヘッドクォーターとなり、自らも各国に出かけ、働きかけを強めていった。

内海氏自身も世界中を飛び回ったのは言うまでもない。

そして、1998年のアメリカのミネアポリスにおけるITU全権委員会議の選挙で、圧勝して当選を果たした。

日本の情報通信史の中で光り輝く“快挙”であった。

私は、この会議に日本ITU協会の団長として出かけることになっていた。しかし、出発前日に「突発性網膜剥離」と診断され、早急に手術しなければ失明すると言われ、ミネアポリスでの結果を現地で直接見る機会を失ってしまったが、本当に素晴らしい快挙であった。

内海事務総局長は、8年間の任期を全うし、国際社会にその名を轟かせたと同時に、日本からそのような人材を輩出したということは、私たち情報通信に携わる者にとって大きな誇りとなっている。

また、日本ITU協会の50年の歴史にも金字塔を打ち立ててくれたことに深く感謝申し上げます。

同時に、ITU事務総局長を輩出することに大きく貢献した日本ITU協会が、今後ますます発展することを期待して止みません。（顔写真は在任当時）

歴代理事長からのメッセージ



在任期間：
2000年7月～2002年6月
現：郡山市長

し な が わ ま さ と
品川 萬里

祝日本ITU協会50周年記念。祝詞言上の機会を賜り光榮至極に存じます。世紀の変わり目に理事長を拝命致しハヤ20年。digital divideとdigital dividendが世界的に語られた年に理事長拝命。そしてこの度はdigital transformation略してDXの時代に。

今は一地方自治体の長として、20年前の第1次digital革命に続く第2次digital革命の渦中にあります。

毎月ITUジャーナルは興味津々です。GAFAは7レイヤーと言えば1番上のレイヤー役。最下位レイヤーから6レイヤーまでの標準化あつてのGAFA。海底ケーブル、通信衛星があつてのGAFA。それが今やGAFAが海底ケーブルを敷

設志望とか。ITUの顔触れも様変わり？ それともITU throughでde facto standard ITUが出来るか？ 興味津々。従ってITU協会の会員もplatform派とapplication派が協奏になるか？ と矢張り興味津々。

山川鉄郎理事長は当に時代の子として理事長職を果たされる事と期待申し上げます。国内もtrafficはケータイが固定を上回っておる由。国際trafficもケータイ間が固定間を上回っていきましょう。かく言う私も市役所内は固定、庁外は殆どスマホ、ガラケー二刀流。

スマホ史からはスマホがplatformを誘導。シッポが象を振り回すの図が、iPhoneとAndroidがplatformをleadするの図、がICT New normal。

端末は既に交換機、が自治体の長の実感です。土木の世界はi-constructionへ。ICTもi-CT? ITUもi-TU?

スマホが市役所の窓口になる日も遠くはありません。自動運転車は自動車がパケット通信のパケット化と同義。

かくして世界はアリスの不思議の国化。銀河鉄道999のheroは鉄郎様と記憶。山川鉄郎理事長の協会操縦の宜しきを祈念し祝詞と致します。（顔写真は在任当時）



歴代理事長からのメッセージ



在任期間：
2007年8月～2009年7月

ありとみ かんいちろう
有富 寛一郎

日本ITU協会がこの9月に50周年を迎えられるとのこと。おめでとうございます。

私が理事長に就任したのは、2007年8月。ちょうど2006年11月にトルコのアンタルヤで開催された「ITU全権委員会」でトゥーレ新事務総局長等が選出され、翌年1月から新しいITUの体制がスタートした年でした。ITU協会として、トゥーレ事務総局長の訪日をはじめとして、新体制と我が国との間でどのような橋渡しができるかが大きな課題でした。

また、2008年には、ITUの標準化活動を支えるため、新たにSG議長等が選出された「世界電気通信標準化総会(WTSA-08)」が、南アフリカのヨハネスブルグで開催され、参加する機会を得ました。ただ、安全対策の観点から会議が開催された会場の中から街中に一切出ることができず、最

初で最後であろうにもかかわらず、南アフリカの文化等に直接触れることができなかったことは今でも心残りです。

2008年9月には、タイで「テレコムアジア」が開催された機会に、調査団を組織し、その団長として、同会議への参加、APTへの表敬訪問に加え、ベトナム、カンボジアの電気通信主管庁等を訪問させていただく機会も得ました。立ち寄った世界遺産であるアンコールワット遺跡のすばらしさは、今でも鮮明に思い出します。

一番頭を痛めたのは、日本ITU協会の新しい役割を模索する中での「公益法人改革」への対応でした。公益法人がよいか、一般法人がよいか、財務状況をどのように試算すればよいか等々、担当の方々には大変なご苦労をおかけしたかと思えます。

理事長職にあった2年間は、テレフォニーからインターネットへの移行の初期段階に当たり、また、京都で開催されたITU「ICTと気候変動に関するシンポジウム」に代表されるような、ITUの新たな役割が模索されはじめた時期でもありました。

今後、ICT環境は、アプリケーションやコンテンツレイヤー中心の産業構造に一層大きく進化することは必至です。ITU及び日本ITU協会は、その“レゾナデール”を新しい環境変化の中でどう再構築していけばよいか、以前にも増して難しくなると思えます。一層のご尽力を期待しております。(顔写真は在任当時)

歴代理事長からのメッセージ



在任期間：
2009年8月～2012年6月

もり きよし
森 清

ITU協会創立50周年、誠におめでとうございます。

私は、2009年8月から2012年6月まで理事長を務めました。他職との兼務で、週に一回完全無給無手当の勤務でしたが、果たして十分な職責を果たせたかどうか、内心忸怩たるものがあります。

逼迫する協会の財政事情を憂慮して、経費節減のため、神田から新宿への移転を決めたり、月刊誌の印刷物刊行をネットオンリーに切り替えたりしました。しかし、総務省への入札に当たっては高品質低価格を極力追求しました。一般財団法人への移行も丁度その頃でした。

東日本大震災直後の「世界情報社会・電気通信日のつどい」式典をどのように挙げるかにも頭を悩ませ、講演を取り止めて講師予定の方にはご迷惑をお掛けしたこともありました。

ジュネーブのITU本部には、何と理事長になって初めて訪れましたが、日本のITU協会からの植樹や富嶽百景の織物の寄贈装飾を見て、また本部で働く日本人スタッフの方にもお会いして、多くの日本人の努力の蓄積が連続と息づいていることを実感しました。

また、当時世の中的に話題となっていた職場のパワハラ、セクハラ問題についての職場研修を行ったのも懐かしい思い出です。

当時は、基本的には今でも同じですが、インターネットや携帯電話の普及進展が著しい時期でした。しかしAIやDXも未だであり、携帯電話も3Gの時代でしたし、SNSも黎明期でしたし、サイバーセキュリティも取組み初期の段階でした。ただ、まだ日本のテレコムが世界に対して存在感を喪失していない時代ではあったように思います。

現在コロナ禍の日本では、薬事的各種対応の遅れやら、縦割の弊害克服のためのデジタル庁の創設等が課題となっています。ICTが環境問題をはじめこうした諸問題の解決、克服にますます有効になっていくことは明らかですので、今後ともそれに向けて貢献し続ける日本ITU協会たらんことを大いに期待したいと思えます。(顔写真は在任当時)

歴代理事長からのメッセージ

在任期間：
2012年6月～2013年11月

すずき やすお
鈴木 康雄

通信の世界的有識者として曾山元郵政次官も加わった委員会の報告書、Missing Linkは、途上国の通信の発展が途上国のためだけではなく先進国にとっても大きな利益になるものであって、全世界で国際協力を進めなければならない、と初めて、ITUでも国際協力の重要性を説いたが、それでもITUは先進国クラブの印象が拭えなかった。それは組織の発生の経緯からしても、標準化が何よりも重要であり、そうした議論に参加できるのは通信を使いこなし、新しい通信方式を提案できる先進国だけだったからやむを得ないことだったであろう。

我が国のITUへの貢献はこれまでも多くの発表がなされているが、その多くは、かつては国策企業たるNTT、KDDと公共放送であるNHKが組織的、人的貢献の多くを担って

きており、最も受益するであろう製造業界は、人事ローテーションの都合もあり貢献が大きいとは言えず、私が郵政省・総務省時代にもメーカートップをお願いしたことがあったが、その効果があったとは言えない状況だった。その後、国際的な標準化団体は分野別に、あるいは重疊的に多数存在することになり、それぞれの分野で活動しているが、今でもITUはその中心としての重要性を保っていると感じている。

私は1981年から在インドネシア日本国大使館に勤務し、帰国後には日本ITU協会の国際協力研究会にも参加したが、盛況とは言えない状況だった。これは当時の、先進国クラブ的な性格を反映したものと思われる。その後、協会はJICAの研修事業も行うようになった。

数年前に当協会に勤務したおり、経営的にはきつく職員に苦勞をかけたが、日本ITU協会賞選考委員の賛同を得て、電気通信を含む幅広い活躍をされた方を表彰させていただくと特別賞を設け、最初の表彰は開発経済学の渡辺利夫拓殖大学学長に受けていただいた。今後も経費的には困難もあろうが、そちらの方面でも貢献され、存在を示されることを切望する。

歴代理事長からのメッセージ



在任期間：
2013年12月～2018年6月
現：一般財団法人マルチメディア
振興センター 理事長

おがさわら みちあき
小笠原 倫明

日本ITU協会の創立50周年おめでとうございます。私は、2013年暮れから4年半、多くの方々のご支援をいただき、何とか理事長職を務めることができました。

就任の翌年2014年10月、韓国・釜山の全権委員会議で、伊藤泰彦様がRRB委員にトップ再選（翌年に議長）されたのは誠に喜ばしい出来事でした。同時に、事務総局長とITU-T局長がアジア2国で占められるのを目の前にし、「日本も再びこうしたポストにチャレンジしなければ」と感じたことを覚えています。

翌2015年はITU創立150周年。3月に就任直後のジャオ事務総局長が来日し、会員の皆様と懇談。5月15日の「つどい」では、事務総局長からのビデオメッセージの後に、小尾敏男先生（元ITU事務総局長特別代表）が総務大臣賞受賞。翌々日ジュネーブでは、坂村健先生がビル・ゲイツ氏ほかと共にITU150周年

記念賞で表彰されました。加えて10月～11月にジュネーブでITU RA（無線通信総会）/WRC（世界無線通信会議）。11月～12月の広島WTIS会合（世界電気通信/ICT指標シンポジウム）では協会職員の多くが広島へ出張、と大忙しの1年でした。

当時の協会の新しい試みを紹介すると、ブダペストで開催されたITUテレコムワールド2015に、日本のSME（Small and Medium-size Enterprise）が初めて出展。ITU本部から賞を頂きました。同じ年開始の「パフォーマティブ・セミナー」では、会員企業の若手社員の方々が外国人俳優相手にロールプレイ。標準化会合等での交渉能力を高める目的ですが、何れも協会職員の頑張りにより、理事長は感心するのみでした。

日本ITU協会賞選考委員会の安田浩・関祥行両委員長には大変お世話になりました。「女性に受賞の機会を」「メーカーにもご配慮を」「海外の方にも」等をお願いを受け止めていただくとともに、委員会での鮮やかなお裁きには毎回感服致しました。

最後に、「世界情報社会・電気通信日のつどい」式典後の懇親会のあの雰囲気は忘れられません。プロクラリネットプレイヤーの松平恒和様（元ITU-T SG3議長）には、いつもノーギャラでの出演恐縮でした。再開を切に祈ります。賛助会員や協会事務局の皆様、本当にありがとうございました。（顔写真は在任当時）



歴代理事長からのメッセージ



在任期間：
2018年6月～2019年11月

ふくおか とおる
福岡 徹

日本ITU協会設立50周年、設立以来の長年にわたり協会活動を支えていただきました皆様とともに、祝意を表します。そして、短期間ではありますが、協会の運営に携わった者として、会員企業・団体の皆様、ITUやAPT等において標準化活動等にご尽力いただいた皆様、総務省、協会の歴代評議員・理事・職員の皆様に、心より感謝を申し上げます。

2017年12月から2年間の任期での最大のイベントはWRC19で、エジプト有数のリゾート地、シャルム・エル・シェイクでの開催でした。警備が厳重で、協会からの現地派遣者

にはいろいろ苦勞をしてもらいましたが、5Gをはじめとした成果に日本政府事務局への支援を通じて貢献できたかと思っています。

当時強く感じたことは、ITU等の活動に深く携わり、貢献いただいている方は、ともすれば企業内でその活躍が見えにくく、しっかり評価されているのか、との不安です。企業の幹部の方にお会いした時はいつも、「飯の種で使っている電波は勝手に降ってくるものではなく(物理的には降ってきますが)、御社の誰々さんの日頃の努力があって周波数が確保でき、干渉なく使えるのです。よく見てください。」と訴えていました。

この意味でも、毎年「つどいの日」での表彰は有意義で、残念ながら昨年から実開催ができなくなりましたが、絶やさず続けていってほしいと思っています。

私ごとながら、現在電波ビジネスに携わり、干渉回避にも苦勞するとともに周波数調整の重要性を実感しています。関係の皆様には、引き続きITU等の活動とそれを支える日本ITU協会へのご支援のほど、よろしく願い申し上げ、50周年への寄稿といたします。(顔写真は在任当時)

歴代理事長からのメッセージ



在任期間：
2019年12月～2020年11月
現：株式会社NTTドコモ 常務執行役員

みなみ としゆき
南 俊行

ITUは国際機関として最も古い歴史を有するだけでなく、時代や技術の変化に柔軟に適応してきました。私企業が参加できる唯一の国際機関としてその活動領域を広げ、障がい者団体と一緒に電話リレーサービスの標準化に取り組んだり、コロナ禍にあってはICTを活用した感染対策を一早くとりまとめ世界に向けて発信をするなど、今なお進化を続けています。デファクト標準が幅を利かすインターネットの世界において、ITUが主導するデジュール標準が色褪せない理由もそこにあります。

日本ITU協会は、こうしたITUの活動を支え、日本

UNESCO協会や日本ILO協会(解散後NPO法人として存続)と並んで国連専門機関の国内受け皿として、長年にわたりその理念と国際精神の普及啓発に努めてこられました。役所に勤めて初めての仕事がITUとの連絡調整であり、協会のオフィスを訪れ、八藤初代理事長からご薫陶いただいたことを今でも鮮明に覚えています。

私が理事長を拝命した1年はコロナ禍との闘いの連続で、電気通信日のつどいの開催延期や研究会活動の相次ぐ中止やオンライン開催への切替を余儀なくされました。それでも関係者の皆様のご協力もあり、新しい「非日常」への取組みの第一歩が印されたと思います。

今後、リアルな国際会議招致をサポートするだけでなく、世界が求めるグリーン化やデジタル化という新しい変化のうねりに敏感に対応し、CSRやSDGs達成を求める声の高まりに耳を傾け、協会が日本国政府と一体となってITUに变革を促していく先頭に立たれることを期待します。次なる75周年という高みに向けて、変わらぬ情熱をもって会員の皆様とともにたゆまぬ努力をされることを切に願っています。(顔写真は在任当時)